青森県立三本木高等学校
附属中学校

県立三本木高等学校附属中学校　『教科の面白さを感じる授業づくり～主体的・

インプットしたことをアウトプットする方法の研究

a 習得した知識や技能を活用する場を意図的・計画的に設定

b 目的を明確にした思考ツールの活用

c 目的を明確にした学習形態の工夫

課題解決学習の質的向上を目指した授業展開の研究

a 生徒にとって自分事で、必然性のある課題を設定

b 学習活動の目的や手立て、ゴールの明確化

c 教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考･判断・表現する場を、意図的・計画的に設定

d 自分の考えをもとに、他者との対話を通して多様な考え方に触れ、新たな気付きや思考の深まりが生まれるような場を意図的・計画的に設定

e 生徒が自分の学びにおける成長や変容を振り返り、次の学びへの見通しや目標を持つことができるような場を適切に設定

成果

○自分の意見や考えをもち、進んで発言したり、目標や計画を立てて学習に取り組んだりと、主体的に学習に
っていると感じている生徒が増えてきている。

○単元・本時のねらい（目標）や生徒の実態に応じて、学習活動と「インプットしたことをアウトプットする
意識しながら実践を行うことができている。

○「教科の面白さ」について、教科全体としてどのように捉えるのか、生徒がその面白さを感じることができ

○先進校訪問や公開発表会への参加等を通して、生徒が課題に主体的に取り組み、一人一人がしっかりと思考

○公開発表会・学力向上フォーラムでの公開授業実践や参観者からの意見や感想、講師を招聘しての研修会等

○公開発表会へ向けて、全教員での指導案検討会を実施し、他教科から学ぶ時間にすることができた。

○研究授業では、事前に参観の観点を明確に示し、協議では、マトリクスシート法等を用い、成果・課題と改

課題

●インプット→アウトプットのプロセスにおいては、引き続き、活用を強く意識していく必要がある。

●まとめと振り返りについて、それぞれの意義の理解を深め、意識していく必要がある。

●「深い学び」については、各教科における「見方・考え方」についての理解を深め、それらを働かせられる

●各教科で話し合って設定した「教科の面白さ」とそれを生徒が感じることができるような方策については、

●一単位時間だけではなく、単元や題材のまとまり、学年の系統性の中で主体的・対話的で深い学びを実現し

●資質・能力の評価をバランスよく行うために、多面的・多角的な評価について指導者の学びを深めていく必

●中高６年間を通して着実に生徒の資質・能力を育んでいけるよう、中高合同での教科部会で目標や手立て、

ダイジェスト版

・対話的で深い学びの視点による授業の質的向上を目指して～』

中学校・高等学校教員が参加する教科部会等の開催

- 中・高教員合同での教科部会での教科指導についての情報交換等
- 拡大校内研での異校種の授業参観、協議
- 外部講師を招聘しての校内研（中・高教員合同で授業づくりについて学びを深める）

全教員による校内研修での学び合い

- 全教員による指導案検討会（教科の枠を越えて、授業づくりについての学びを深める）
- 研究授業等における、事前の参観観点の明確化、ワークショップ形式で、生徒の学びの姿を基にした協議

取り組む生徒、対話を通して多様な考えに触れることが、自分の考えを深めたり広げたりすることにつなが

方法の研究」「課題解決学習の質的向上を目指した授業展開の研究」に係る８項目とのつながりを明確にし、

るような方策について各教科で話し合って具体的にした。
している様子を具体的に参観することができた。
を通して、主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりについて、学びを深めることができた。

善策（アイディア）を連動させて、子どもの学びの姿を基にした話合いを行うことができた。

ような学習活動を工夫するとともに、学びの過程についても更に重視していく必要がある。
２年間の取組を踏まえ、再度確認と、必要に応じて見直しをする必要がある。
ていくために、単元の指導（評価）の構想や年間指導計画を見直していく必要がある。
要がある。
生徒の学びの状況を共有したり、実践を参観しあったりする機会をより充実させていく必要がある。

１　研究の概要

（１）研究目標

研究スタート時、本校生徒の実態は以下のとおりであった。

現状：授業中の発表が活発であったり、知的好奇心をもって積極的に学習課題に取り組んだりしている生徒が多い。学習状況調査など各種学力検査での達成率は高い。

課題：学習への目的が明確でない生徒、教師の指示待ちであったり、与えられた課題をこなしたりするだけの生徒も存在する。

このような実態を受けて、「生徒一人一人が教科の面白さや学ぶことの楽しさを感じ、より主体的に学習に取り組むことができるようにするためには、主体的・対話的で深い学びの視点を意識した授業の積み重ねが有効であることを実践を通して明らかにする」という研究目標を掲げ、「教科の面白さを感じる授業づくり～主体的・対話的で深い学びの視点による授業の質的向上を目指して～」という研究主題を設定した。

（２）研究の取組

研究目標に迫るために、以下①～④の４点を柱として取り組んだ。

① **インプットしたことをアウトプットする方法の研究**

a　習得した知識や技能を活用する場を意図的・計画的に設定する。

b　目的を明確にした思考ツールの活用を図る。

c　目的を明確にした学習形態の工夫を図る。

② **課題解決学習の質的向上を目指した授業展開の研究**

a　生徒にとって自分事となる、必然性のある課題を設定する。

b　学習活動の目的や手立て、ゴールを明確にするなど、見通しを持たせる。

c　教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考･判断・表現する場を、意図的・計画的に設定する。

d　自分の考えをもとに、他者との対話を通して多様な考え方に触れ、新たな気付きや思考の深まりが生まれるような場を意図的・計画的に設定する。

e　生徒が自分の学びにおける成長や変容を振り返り､次の学びへの見通しや目標を持つことができるような場を適切に設定する。

ア　普段の授業において、学習者中心の主体的・対話的で深い学びが実現されるよう、上記①と②の各項目（a～e）について意識した授業づくりに取り組んだ。各項目の文言については､『平成２７・２８年度重点事業「主体的に学ぶ力を育む学力向上推進事業」学力向上アドバイザー会議のまとめ「主体的に学ぶ力を育むために」』(平成２９年３月　青森県教育委員会）と『主体的に学ぶ力を育む授業改善ハンドブック』(平成２９年３月　青森県教育委員会）を参考に本校の実態を考慮して設定した。全ての項目を毎時間意識するということではなく、例えば､「本単元では（本時では）この項目を意識した授業づくりをしよう」というように授業者が単元や本時のねらい（目標）や生徒の実態に応じて具体的な取組を明確にした実践がなされるよう、共通理解を図りながら進めた。

イ　単元・本時のねらい（目標）や生徒の実態に応じて計画したそれぞれの学習活動が、主体的・対話的で深い学びの視点とどのようなつながりがあるのかを指導者が明確にして授業を行うことができるよう、また、参観者にも事前にしっかりと伝わるよう、学習指導案に学習活動と上記①と②の各項目（a～e）との関連等について明記した。

ウ　主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりに関わって、先進校を視察したり、公開発表会に参加したりし、その後、資料等を活用して学んできたことを共有した。

○期　日：平成２９年７月１３日（木）～１４日（金）
研修先：学校法人鈴鹿享栄学園　鈴鹿中等教育学校・高等学校
内　容：主体的・対話的で深い学びの視点での授業視察、協議
・　先進校において、岩佐　純巨氏（鈴鹿中等教育学校　特命非常勤講師　授業力向上推進部長）による授業を視察した。生徒が課題に取り組む姿が受け身ではなく、一人一人が一生懸命思考している様子が目に見えて分かる授業であった。
　岩佐氏が授業で重視していることとして、以下の３点についてお話しいただいた。
ⅰ）教科の本質を理解してもらうための「なぜそうなのか？」から入っていく授業。
ⅱ）「その週の授業で何が一番大切だったか」「自分が何を理解することができたか」をレポート形式で提出する、自分の学びの過程を主体的に振り返るための週末課題。
ⅲ）必ず自分で考える時間与え、解くための切り口を共に見出すためのグループ活動。

○期　日：平成３０年２月２４日（土）
研修先：横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
内　容：平成２９年度研究発表会参加（公開授業、研究協議、講演等）
・　「知識・技能」が日常生活や他の学習、自分の将来や社会にどうつながるのかを生徒自身が実感できる単元構想（「カリキュラム・デザイン」）に迫るために、①振り返りの質、②教科の特性を重視した３年間の見通しと単元構成、③生徒が主体的に活動できる場面設定について意識した授業づくりに取り組んでいた。

○期　日：平成３０年１０月１２日（金）～１３日（土）
研修先：横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
内　容：平成２９年度研究発表会参加（公開授業、研究協議、講演等）
・　資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントと学習評価の充実を図るために、①「生徒に育成したい資質・能力」の育成された姿の共通理解、②PDCAサイクルの確立、③全教員による共通の単元題材シートの利用に取り組んでいた。

○期　日：平成３０年１０月１９日（金）
研修先：新潟大学教育学部附属新潟中学校
内　容：平成２９年度教育研究発表会参加（公開授業、フォーラム、協議会、講演会）
・　「思考力・判断力・表現力」「人間性」「メタ認知」を発揮しつつ、「学びの再構成」（今まで学習した内容をつなげること）を目指し、全教科で「プログレスカード」を使用し、学びの変容を可視化するポートフォリオを推進していた。

○期　日：平成３０年１１月２日（金）
研修先：宮城教育大学附属中学校
内　容：平成３０年度公開発表会参加（公開授業、教科分科会、講演会等）
・　自立・協働・創造に向けた力を育む授業を目指し、各教科で目指す生徒像を設定したり、学習の系統性や他教科との横断的・相互的な関連を明確にしたりしていた。

○期　日：平成３０年１１月９日（金）～１０日（土）
研修先：秋田県大館市
内　容：平成３０年度学力向上フォーラム参加（公開授業、協議会、実践発表、講演）

・　「未来大館市民」の育成に向けて、大館ふるさとキャリア教育を根幹に据え、主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりのため、教師の深い教材研究・授業構想に基づいた「共感的・協働的な学び合い」を核とする実践を積み重ねていた。

○期　日：平成３０年１１月１６日（金）
研修先：横浜市立南高等学校・南高等学校附属中学校
内　容：平成３０年度公開授業研究会参加（公開授業、教科分科会等）
・　主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりを目指し、体験的、課題解決的学習、発展的な学習、調べて書く、意見を述べる、情報の活用などを多く取り入れた実践を行っていた。

○期　日：平成３１年２月５日（火）～６日（水）
研修先：文部科学省、ビジョンセンター浜松町
内　容：平成３０年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会参加
（研究指定校による発表、協議、担当調査官等による講評）
キーワード：学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究

○期　日：平成３１年２月２３日（土）
研修先：横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
内　容：平成３０年度研究発表会参加（公開授業、全体講演、研究協議）
キーワード：新しい時代に必要となる資質・能力の育成への試み～「深い学び」へと導く授業の在り方～

③ **中学校・高等学校教員が参加する教科部会等の開催**

ア　中・高教員合同での教科部会を開催し、教科指導についての情報交換等を行った。
イ　拡大校内研では、異校種の授業を参観し、協議を行った。
２９年度：国語、数学、理科、英語
３０年度：国語、社会、数学、理科、英語
ウ　外部講師を招聘しての校内研を行い、中・高教員合同で学びを深めた。
講師：岩佐　純巨氏（鈴鹿中等教育学校　特命非常勤講師　授業力向上推進部長）
内容：講師による師範授業（数学）を参観
講義　「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業づくり
・　師範授業では、生徒が個人やグループで考える時間が十分に確保され、主体的・協働的に課題に取り組む姿を見ることができた。講義では、新しい学習指導要領が目指すもの、主体的・対話的で深い学び、学習活動の類型、教科指導の意義、ＡＬ型授業実践の留意点についてお話しいただいた。

④ **全教員による校内研修での学び合い**

ア　公開発表会に向けて、全教員による指導案検討会を行い、「自分の教科だったら・・・」「自分の教科のこういう部分に生かすことができる」など、教科の枠を越えて、授業づくりについての学びを深めた。
イ　研究授業等では、事前に参観の観点を明確に示し、協議では、ワークショップ形式で、生徒の学びの姿を基にした話合いを行った。

（３）研究経過

期日	実施内容
H29 ４月	２９年度の研究運営について（全体会）
５月	研究計画書提出
７月　５日 ７月１３日～１４日	授業改善実践校連絡協議会①出席 先進校視察（学校法人鈴鹿享栄学園　鈴鹿中等教育学校・高等学校）
９月　４日 ９月　８日 ９月２２日	授業改善実践校連絡協議会②出席 外部講師を招聘しての研修会（師範授業参観・講義） 講師：岩佐純巨氏（鈴鹿中等教育学校 特命非常勤講師 授業力向上推進部長） 公開発表会授業指導案検討会（全教員）
１０月１２日 １０月１３日	実践校公開発表会（数学） 指導助言：太田浩之氏（東北町立東北中学校　校長） ＷＥＢ授業動画撮影（数学）
１１月２４日	県学力向上フォーラム授業公開（英語）
２月１４日 ２月１９日 ２月２４日	授業改善実践校連絡協議会③出席 外部講師を招聘しての研修会（全国学テ・県学テについて） 講師：竹川康則氏（県教育庁学校教育課　指導主事） 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校研究発表会参加 １年間の成果と課題について（教科部会・全体会）・研究報告書提出
H30 ４月 ４月１９日	３０年度の研究運営について（全体会） 授業改善実践校連絡協議会①出席
５月	研究計画書提出
６月２７日	校内研研究授業（理科） 指導助言：奈良岡臣哉氏（六ヶ所村立六ヶ所第二中学校　校長）
８月１７日・２３日	公開発表会授業指導案検討会（全教員）
９月　７日	授業改善実践校連絡協議会②出席
１０月１０日 １０月１１日 １０月１２日～１３日 １０月１９日	実践校公開発表（国語・社会） 指導助言：舘山知昭氏　三橋央尚氏（県教育庁学校教育課　指導主事） 講演講師：黒上晴夫氏（関西大学　教授） ＷＥＢ授業動画撮影（社会） 横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校公開発表会参加 新潟大学教育学部附属新潟中学校公開発表会参加
１１月　２日 １１月　９日～１０日 １１月１６日	宮城教育大学附属中学校公開発表会参加 秋田県学力向上フォーラム参加 県学力向上フォーラム実践発表 横浜市立南高等学校・附属中学校公開発表会参加
１２月２７日 １月２１日	全国学テ・県学テに係る校内研修 授業改善実践校連絡協議会③出席
２月　５日～６日 ２月２３日 ２月～３月	国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会参加 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校研究発表会参加 １年間の成果と課題について（教科部会・全体会）・研究報告書提出

２　各教科での実践

（１）３学年　数学科　学習指導案

平成２９年１０月１２日（木）　クラス：２年２組

授業者：武田　信浩　教諭　　題材名：「星形多角形」

本時の目標:「既習事項を用いて星形多角形の先端の角の和を求め、一般化することができる」

過程	学習内容	○評価●留意点 ◎手立て
導入 5分	○前時の確認をする。 ・星形五角形の先端の角の和を求めた　・いろいろな方法があった ・【５点の２つ目結び】と定義した ・【５点の２つ目結び】と【５点の３つ目結び】は同じ結果だ ○【*18*点の *4*つ目結び】星形多角形を提示し、先端の角の和を求められるか考える。 ・難しそう　・複雑だ　・何点の何つ目結びだろうか ・もう少し角の数が少ないと求められそうだ 星形多角形の先端の角の和について調べてみよう	[主]2-a, 2-b ●点と結び目については触れない。
展開 30分	○好きな星形多角形を一つ書き、先端の角の和を求める。 ○結果をとなりの生徒と交流する。 ・【何点の何つ目結び】の星形多角形を求めた（求めようとした）か ・求め方も説明し合う ○黒板に掲示された個人の結果を確認する。 ○４人グループになり、表について考える。 ・縦にみると 180°ずつ増えている ・横にみると 360°ずつ減っているが途中から 360°ずつ増えている ○どんな星形多角形でも求めるにはどうすればよいか考える。 ・180(n–2)、180(n–4)、180(n–6)、180(n–8)と結び目が変わると、n からひく数が変化している 【n 点の k つ目結び】でできる多角形の先端の角の和は，180(n−2k)と表すことができる。180(n−2)は k=1 のとき，と見ることができる。	[主]1-a [対]1-a ●求められなかった時は、他の生徒の説明を聞く。 [深]2-c ○表の変化を見いだし一般化できたか。（ワークシートの記述）
まとめ 15分	○提示問題を解く。 ・図形を【*18*点の *4*つ目結び】と捉え、一般化した式を用いて求める ○表と式を比べる。 ・式が成り立たないときがある　・【*5*点の *4*つ目結び】だと 540°なのに式だと 180(5–2×4)=–540°になる ○求めた式が成り立つようにするには、どう考えればよいだろうか。 ・(n−2k)の部分を絶対値ととらえれば成り立つ ○本時の振り返り（感想）を書き、発表する。 ・自分たちが書いた図から，規則性を見付けることで，一般化することができた。 ・星形多角形の角の和も，多角形の内角の和も実は同じ式と見ることがきて，驚いた。	[深] 2-d ◎結び目に新たな文字 k を用いることを伝える。

【生徒にとって必然性のある課題の設定】

前時の学習内容を確認した後、角の数がかなり多い星形多角形を提示することで生徒が感じる気持ち（難しそう、複雑だ、もう少し角の数が少ないと求められそうだなど）を本時の課題につなげることをねらった。

生徒が感じる気持ちを生かし、任意の星形多角形を書かせることで見通しをもつことができ、課題がより身近なものとなった。

【話合いで多様な考え方に触れる】

グループでの話合いで多様な考えに触れることによって、生徒一人一人の一般化までの考えの変化や深まりにつながることをねらった。

一人の生徒が発した疑問に対して、「ワークシートを見てごらん。〇〇な見方もあるよ。」など、他のメンバーが考える手段や視点を提案し、学びを深め合う姿も見られた。

授業者が子どもたちのゴールの姿について具体的なイメージをもった上で指導できるよう、学習指導案のまとめの最後の活動である「振り返り」のところに、生徒からこのような振り返りが出てくることを期待したいという文言を記載した。ただし、これらはあくまで授業者の考える振り返りであり、これ以外のことでも生徒が自分の学びの過程をしっかりと見つめ、振り返ること、お互いに学び合うことを大切にしたいと考えた。

以下は、生徒のワークシート（「振り返り」の部分）より抜粋したものである。

・一般化をすることで、今まで使っていた式とつながったのでびっくりしました。自分で式をつくれたので達成感を感じました。また、規則性がありそうな問題にチャレンジしたいです。
・今までに習った１８０（n－２）の式とｎ点のｋつ目結びでできる図形の関係が分かり、楽しかったです。図形に関わらず、様々なものに法則性があるので、色々な法則を見つけられたらいいなと思います。仲間と協力してできたのも良かったです。
・一見難しいように見える図形でも法則があり、それを見つけることで解くことができるようになるのが数学の面白さだと思いました。また、その法則を知って応用できるようにしたいです。
・好きなように点を取り星形多角形のようなものを作ったら、どの図形になっても、どの点の何つ目結びでも、角度の和が求められたことにびっくりしました。今まで計算が大変だと思っていたのに簡単な式で表せたので、これから求める時は、この式を使いたいです。
・図形の角度なども、全て何かを見つけられれば答えを導くことができ、そこから発見できる何かは全てにつながるということが今日でまた分かった気がします。最初のほうでやったことも、今日またつながったので数学はおもしろい！

（２）１学年　英語科　学習指導案

平成２９年１１月２４日（金）　クラス：１年２組

授業者：永井　英樹　教諭　　題材名：「外国の学校について知ろう」

本時の目標：「３つの国の学校についての情報を読み取ることができる」

過程	学習内容	○評価 ●留意点 ◎手立て
導入 8分	○ペアで１分間チャットを行う。 "What country do you like?" （予想される生徒の反応） ・I like America. How about you? ・I like Italy. The food is delicious. ○教師とのインタラクションを通して、本時の課題を把握する。 ・授業者の友人である外国人から、各国の学校についての調査への協力依頼があり、それに応えるという場面設定とする ３つの国の学校についての情報を読み取ろう。	●視線やあいづち、well..., Um...などの間を埋める表現を意識させる。 **[主]2-a, 2-b** ●課題提示に当たり単元のゴール（理想の学校について英作文をする活動）のために表現を増やすことが目的であることを伝える。
展開 35分	○４人グループを作り、ワークシート１に記載されている日本についての英文をもとに、情報交換の仕方を体験する。 ・分からない単語はWhat does this word mean? - It's ～.のように英語で会話する。 ○各自がそれぞれのコーナーに行き、最初の国の学校についての英文を指定された時間で１文ずつ覚えメモする。早く終わった場合は、発展課題の英文もメモする。〔４コーナーズ〕 ○グループに戻り、それぞれが分かったことを伝え合い、ワークシートにまとめる。グループのメンバーへの報告は英語で、キーワードやメモは日本語でもよいこととする。 ○チャレンジタイムで、英文が理解できなかった場合はグループの他のメンバーと協力して読む。全ての文をメモできた班は発展課題の英文の読み取りにチャレンジする。 ○残りの２か国についても同様に活動を行う。終了後ワークシート２を受け取り、正しく情報を読み取れているか確認する。 ○どの国の学校がよいか英語で意見交換する。 ・I like America because summer vacation is very long. ・I like Brazil because they have classes only in the morning. ○次時では今までの既習事項を用いて理想の学校について考え、英文で書くことを再度確認する。その際に使えそうな表現をワークシート２の英文から選び、下線を引く。	**[主]1-c** ●途中でメモするために自席に戻ってもよいことを伝える。 **[対]2-d** ○自分やグループのメンバーが担当した各国の学校についての情報を理解し、シートに記入することができたか。 （ワークシートの記述） ◎グループの中からサポートのメンバーと共にもう一度読み直しをさせる。 **[深]2-c** ●ここまでの学習を「自分たちの理想の学校」の英文作りに生かすことを再確認する。
まとめ 7分	○ワークシートで本時の振り返りをする。 ・わからない単語や文法があったが、グループのメンバーと協力して学校についての情報をつかむことができた。 ・次の時間の理想の学校について書く際に使えそうな表現を見つけることができた。	●グループで感想を共有させ、発表させる。

【ゴールの明確化】

「本時の課題の提示」では、何のためにグループで協力して英文を読み取るのかについて、「３つの国のどの学校がよいか最終的に意見交換する」という目的を明確にすることで生徒にとって必然性のある課題になるよう配慮した。また、前時の活動とのつながり、単元の最終ゴール（自分の理想の学校について英語で表現すること）を本時でも明確に示すことで見通しを持たせることができた。

【グループ活動の目的の明確化】

「４コーナーズ」では、一人一人異なった情報を持ち寄ることで、ある国の学校についての情報の全体像（４つの情報）が見えてくるという活動を設定し、それぞれが目的と責任をもって活動できることを意図して、４人グループでの活動とした。

生徒の理解度は様々だが、分からない部分がある生徒も、諦めずに何度も英文を確認したり、前後の英文から予測して読み取ろうとしたりする姿が見られた。

他者とのやりとりを通して新たな気付きや考えの深まりが生まれることを意図して、グループ内で一人一人が分かったことを伝え合い、ワークシートにメモする活動を設定した。一人一人が読み取った内容をつなぎ合わせていく過程で、疑問点やアイディアを出し合い、グループの仲間と協力して、より多くの情報を得て、全体像を明らかにしようとしていた。

やりとりについては、自分の言葉でアウトプットする経験を積ませ、より実践的な内容を意識していく必要がある。

○参加者の声から（抜粋）

・英文全てが理解できなくても、互いに助け合い、不完全な部分を補いあいながら学びを深めていっているのが良かったと思います。

・課題を解決するために、「一人一人が責任をもって英文を読んで情報を得る」、「それをグループのメンバーと共有する」というそれぞれの活動の目的が明確であり、有効だったと思います。

（３）３学年　理科　学習指導案

平成３０年６月２７日（水）　クラス：３年１組

授業者：竹内　一正　教諭　　題材名：「エネルギー効率」

本時の目標：「エネルギーが変換されるとき、エネルギーの利用効率に違いがあることを指摘することができる」

過程	学習内容	○評価●留意点 ◎手立て
導入 10分	○前時の確認をする。 ・エネルギーには様々な種類があった ・エネルギーは互いに移り変わりながら、その総量は保存される →力学的エネルギー保存の法則、エネルギー保存の法則 ○「省エネ」という言葉が定着してきたが、省エネとは何のことか考える。 ・エネルギーが少ない　・電気代がかからない　・節電 ○「省エネ家電」の代表格であるLEDはこれまでの電球と何が違うのか考える。 省エネ家電の特性は何か	
展開 30分	○「省エネ家電」の特性について思いつくものを書き出す。 ・電気代がお得　・省電力　・経済的　・エネルギーが少なくて良い ○同じ明るさの白熱電球とLEDに流れる電気の違いは何か考える。 【実験】ほぼ同じW数の白熱電球とLEDの消費電力、電流値を測定 ・LEDの方がW数が小さい　・LEDの方が電流が小さい ○なぜLEDの方が電流が小さくて済むのか、グループで話し合って考える。 ・抵抗値が大きい　・特殊な装置が入っている　・エネルギーが小さい ○グループごとに発表する。 ○発表された内容をもとに、討議して原理について理解を深める。 ・白熱電球は電流が多い割に暗い　・LEDに比べて白熱電球は熱い ・電流が光に変換される割合が違う ○LEDを例に考えたとき、「省エネ家電」の特性はどのようなことだと説明できるか、その説明に必要なキーワードは何か考える。 ○個人で説明文を書く。 ○グループ内で検討し、各グループで説明文をつくり、発表する。	◎ノートに書きださせる。 ●実験は演示でのみ行い、時間をかけない。 [対]2-d ◎教師の発問により原理について理解を深める。 ○説明文を書くことができたか。 （ノートへの記述）
まとめ 10分	○まとめを書く。 省エネ家電の特性は （例）エネルギーの変換効率が良く、電気エネルギーを節約することができる ○電球の種類ごとの変換効率や同じような工夫がなされている他の家電などについての紹介を聞く。	[深]2-e ○週末課題の内容

【生徒同士での気付きを促すための話合い】

明確な答えを導き出すことを目的とせず、生徒同士での気づきを促すことを目的として、グループでの話合いを行った。

初めに個人で考える時間を確保し、その後グループ内で考えや意見をホワイトボードに書き出しながら集約していった。その過程で、疑問点等について相互に話し合い、理解を深めていくことができていた。

演示実験の測定値を用いるなど、具体的に話合いを進めるグループも見られた。

【教師との対話を通して思考を深める】

新たな気付きや思考の深まりが生まれるよう、生徒同士のやりとりだけではなく、「教師との対話の場面を設定すること」を意識した。グループで話し合った内容を発表させ、その中からキーワードを全体で確認し、結論を導き出させていく過程で、教師側からの様々な発問により、生徒からは出なかった視点や自分達の班にはなかった考え方に気付くなど、思考を深めることができていた。

その週に学んだことについてレポートすることを週末課題とした。

内容は、「授業内容の要約」「要約をして気付いたこと、変わったこと、他の分野との関わりなど」「課題（疑問点、確認しなければならないことなど）」である。

その週に学んだことを改めて振り返り、まとめる中で、新たな気付きや疑問点を挙げたり、日常生活とのつながりの視点で書いたりしてくる生徒も見られるようになってきている。

週末課題のワークシートは、先進校視察でお世話になった鈴鹿中等教育学校の岩佐純巨氏の取組を参考に、本校の実態を考慮して作成した。

【週末課題（ワークシート）の例】

（４）２学年　国語科　学習指導案

平成３０年１０月１０日（水）　クラス：２年１組

授業者：久慈　一徳　教諭　　題材名：「扇の的ー「平家物語」から」

本時の目標：「那須与一が賞賛された理由は何かについて、学習形態を工夫することによって読み取りを深め、源平どちらかの兵の言葉としてまとめることができる」

過程	学習内容	○評価　●留意点 ◎手立て
導入 ５ 分	○事前に書いた「扇の的」を読んでの感想を聞く。 ○本時の課題の確認をする。 敵味方を問わず、那須与一を賞賛した理由を考えよう。	〔主〕２－ａ ●生徒達の感想を基に設定した課題となるよう留意する。
展開 35 分	○本時の場面を音読する。 ○敵味方を問わず、その場にいた者すべてが那須与一を賞賛した理由を個人で考え、ワークシートに記入する。 ○グループ学習に取り組む。 【手順１】意見を紹介し合う。 【手順２】紹介し合った以外の読み取り方がないか話し合う。 ○グループで出た意見を発表する。 ・「をりふし北風激しくて」とあるので、強い風の中でも扇を射落としたからだと思う ・「磯打つ波も高かりけり」とあるので、波で舟も扇も揺れ動いている状況でも扇を射落としたからだと思う ・「二月十八日の酉の刻」とあるので、薄暗くて視界が悪い中でも扇を射落としたからだと思う ○生徒から出てきた意見を掘り下げたり、出てこなかった考え方を確認したりする。 ・もしも与一が扇を射落とせなかったら、どうなっていたと考えられるか ・与一は、どこから、どのような状態で矢を射たか ・「北風」と、風に対して吹いてくる方角が記してあるが、両軍の位置関係はどうであったか	●机間指導を行い、書けていない生徒には、弓道で矢を的に当てることと、本場面で扇を射落とすことの違いを考えるよう助言する。 〔対〕〔深〕２－ｄ
まとめ 10 分	○源平どちらかの兵になりきり、那須与一を賞賛する言葉を、理由を明確にして１５０字～２００字程度で書く。 【源氏方の立場】 さすがは源氏を代表する弓の名手、那須与一である。風や波などの悪条件をものともせず、よくぞ扇の的を射落とした。いや、それだけでなく、お主は己の命や源氏の威信をかけて扇を射落とした。お主は、とてつもなく大きな緊張を背負い、矢を射たことだろう。弓の技術だけでなく、お主の強い心に感服だ。 【平家方の立場】 与一、我々はお主が扇を射落とせるなど、微塵も思っていなかった。７０ｍを超える距離、視界の悪さ、強風に高い波、これだけ不利な状況で、誰がほんの小さな的を射抜けると思うだろうか。それも、お主はたった一度で射てしまった。敵ながらあっぱれである。源氏の那須与一、この名前は忘れぬぞ。	○源平どちらかの兵の言葉として考えを書くことができたか。 （ワークシートの記述） ◎書けていない生徒には、型（～だから賞賛します）や視点（理由の中で重要だと思われるものに注目する）を示し、それらに基づいて書くよう助言する。

【生徒が事前に書いた感想を本時の課題へつなげる】

目的意識をもって、積極的に学習に取り組めるよう、事前に生徒が書いた感想を課題設定へつなげ、それを解決する授業を組み立てた。

生徒の感想（意見）をもとにして展開したことにより、課題に対して興味関心をもって取り組む生徒が多く見られた。

感想を紹介する際、一つのことに絞ったが、複数紹介することで、課題をより自分事として捉えられたと考える。

【様々な読みに気付かせるためのグループ活動】

同じ物語（場面）であっても様々な読みが可能であることに気付かせることをねらって、グループでの話合い活動や他のグループの発表を聞く機会を設けた。

個人ではうまく意見を書けていなかった生徒が、グループ活動によって考えを整理し、意見を書くことができていた。

「精神面や天候面など、条件的な難しさの中で射落としたから賞賛した」という捉えさせたい内容からずれた意見も見られ、事前の指示の仕方や流れの組み方の工夫で改善できると考える。

【教師との対話を通して深める】

生徒同士の交流だけではなく、教師との対話の場面を設定することで、意見を更に掘り下げたり、出てこなかった意見を確認したりすることを意識した。

教師との対話の場面を設けることで、新たな気付きが生まれたり、考えを深めたりすることができていた。

生徒がより関心をもって対話を行えるよう、発問の仕方を工夫するなど、教師が話す時間が長くなりすぎないように工夫する必要がある。

○指導助言

・うなずいたり、質問したり、他の生徒の意見に対するリアクションがよくできていた。

・古典は音読が大事なので、生徒だけで読ませるのではなく、教師側で範読をしてほしい。すると、作品に生徒を入り込ませることができる。また、正しい読みを生徒にしっかり伝えることができる。

・単元構想を大事にして授業実践に取り組んでもらいたい。

（５）３学年　社会科　学習指導案

平成３０年１０月１０日（水）　クラス：３年１組

授業者：山田　達　教諭　　題材名：「企業の経済活動はどうあるべきかの課題設定」

本時の目標：「企業の経済活動はどうあるべきかという単元課題について、思考ツールで整理分析し、解決の見通しを持つことによって、これからの学習でどのようなことを学んでいきたいのかを記述することができる」

過程	学習内容	○評価　●留意点 ◎手立て
課題の設定 15分	○株式学習ゲームの途中経過を発表する。 ○株式学習ゲームを振り返りながら、日本の企業のイメージについてウェビングを用いて、できるだけたくさん書き出す。 ○書き出した内容について感じたことを発表する。 ○教師の準備した資料をもとに、日本企業の魅力（プラス面）とマイナス面を資料で確認する。 ○日本の企業のプラス･マイナス面を確認し、気づいた事を発表する。 ・日本の企業には、解決しなければならない様々な問題がある ・もっといいイメージがあったが残念な感じがする ・このままでは、将来が心配である ・どんな企業に就職すべきなのだろうか・・・ ○単元の学習課題設定　『企業の経済活動はどうあるべきか』	●既習事項から考える。 ●資料のギャップから、生徒の気づきを引き出し、課題設定につなげる。 〔主〕２－ａ
整理・分析 25分	○日本の企業の現状を整理するために、「企業の経済活動はどうあるべきか」について、①企業側の「ねがい」②労働者側の「ねがい」に分けて付箋に書き込む。 ① 企業側の「ねがい」：・環境に配慮し社会に貢献したい／・健康に労働者が働いてほしい／・商品の品質を絶対的に高めたい／・サービスの向上／・世界進出 ② 労働者側の「ねがい」：・サービス残業なし／・賃金格差をなくしてほしい／・パワハラなくしてほしい／・休みがいっぱいほしい／・リストラなし ○企業側と労働者側の「ねがい」を合わせ類型化し見出しを付ける。 ○日本の企業の経済活動において、早急に取り組む必要のあると思われる項目から優先順位（１位～３位）をつけ理由付けを行う。 ○他の班の考えを知るために、歩いて他の班のシートを見る。 ○自分たちの班での話し合いの活動を振り返りながら、他の班のシートを見て感じたことを発表する。	●ウェビングを生かし、それぞれ３つ以上書けるように、教科書、資料を確認してもよしとする。企業側を赤、労働者側を青の付箋に書き込む。 〔深〕１－ｂ ●４人組のグループ活動とする。（ＫＪ） ●説明役を一人残す。
まとめ・表現 10分	○各班のシートを見て「企業の経済活動はどうあるべきか」という単元課題に対して、どのようなことを学んでいけば解決できそうなのか（調べたいこと）とその理由を記述する。 『一般的に人気のある企業は雇用の面でどのような経営努力をしているのか調べたいと思いました。なぜなら、将来自分の就職にも役立つと思ったからです。』	○これから学んでいきたいことを記述することができたか。 （ワークシートの記述） ◎グループで行ったKJシートから言葉をつなげ、文章化できるようアドバイスを行う。

【生徒が感じたことを課題設定に生かす】

株式学習ゲームを通して得た経験と、そこから感じ取った企業イメージや教師の準備した資料を基に課題設定へつなげた。

本校職員が出演した写真を用いたことで、「労働」についてより身近に考えさせることができた。

法治国家とブラック企業というギャップを感じ、「このままでは企業に就職したくない！」というつぶやきが出るなど、関心を高めることができた。

【目的を明確にした思考ツールの活用】

企業・労働者の解決しなければならない問題を可視化し明確にすることをねらって、思考ツール（KJ 法と序列化）を用いた。

思考ツールを用いることで、非常に活発な意見交流が実現した。生徒は自分事として課題解決のための考えを出し合った。また、項目分けをすることで、企業側と労働者側の願いで共通するもの、相反するものがはっきりとし、多面的な視点からの話合いが行われていた。

序列化の場面で、「早急に取り組む必要があるもの」というキーワードを言うことを忘れてしまったが、生徒達は「優先順位」という言葉からその意味を理解し、順位付けを行うことができていた。

まとめの段階での「企業の経済活動はどうあるべきか」という単元課題に対して、どのようなことを学んでいけば解決できそうなのか（調べたいこと）とその理由を書く場面では、思考ツールを用いての話合いを生かし、これからの学習に向けての意欲が高まったことがうかがえる内容の記述が多く見られた。

○指導助言

・今回の指導案には「2-a」「1-b」などと表記されているので、授業展開のどの部分に「主体的」「対話的」「深い学び」の視点があるのかが分かりやすい。
・思考ツールは、もっている知識を活用するのに有効である。
・中学校社会科は小学校と高校の接続部分である。目の前の生徒をどう導くか、３年後に主権者となることを意識して指導していきたい。

３　研究のまとめ

（１）　生徒の変容

①　県学習状況調査質問紙調査　　上段：本校　下段：県　（単位：%）

評価の観点	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらな	当てはまらない
授業では、自分の考えをもつことができていると思う	44.9	47.4	7.7	0
	35.3	43.7	17.3	3.6
授業では、いろいろな考えを聞き、自分の考えを深めたり、広げたりしていると思う	53.8	38.5	7.7	0
	37.9	40.5	17.9	3.7

②　全国学力・学習状況調査生徒質問紙　　上段：本校　下段：全国
「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した生徒の割合（単位：%）

質問事項	H28	H29	H30
家で、学校の授業の予習や復習をしていますか	60.2	62.6↑	88.5↑
	42.6	41.1	55.2
生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思いますか	84.8	85.9↑	94.9↑
	64.8	64.8	76.3

③　生徒アンケート（本校教育目標到達度評価を活用）
４段階評価で「とてもよくできた」、「できた」と回答した生徒の割合（単位：%）

評価の観点	H29　７月	H29１１月	H30　７月	H30１１月
授業のねらいを理解し、学習に集中して取り組む	88.9	89.9↑	94.1↑	96.6↑
進んで自分の意見・考えを発言する	72.9	77.1↑	79.7↑	82.8↑
目標や計画を立てて学習に取り組む	82.5	88.4↑	88.2	90.2↑
毎日家庭学習に取り組む	92.9	94.9↑	95.0↑	95.8↑

生徒が「学習課題を自分事として捉えること」、「学習活動の目的や手立て・ゴールを理解して見通しを持つこと」、「思考し、多様な考え方に触れる中で学びを深めていくこと」ができるような授業づくりを意識することで、より多くの生徒が、自分の意見や考えをもち、進んで発言したり、目標や計画を立てて学習に取り組んだりと、主体的に学習に取り組むようになってきている。また、対話を通して多様な考えに触れることが、自分の考えを深めたり広げたりすることにつながると感じている生徒が増えてきている。

（２）　研究の成果

①　主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりにおいて、単元・本時のねらい（目標）や生徒の実態に応じて、学習活動と「インプットしたことをアウトプットする方法の研究」「課題解決学習の質的向上を目指した授業展開の研究」に係る８項目とのつながりを明確にし、意識しながら実践を行うことができている。

② 本校研究主題である「教科の面白さ」について、１単位時間、１単元での面白さだけではなく、教科全体としてどのように捉えるのか、各教科で話し合って具体的にした。教科経営案に、生徒がその面白さを感じることができるような方策についても記載し、日常の授業づくりでも意識した。

③ 先進校訪問や公開発表会への参加等を通して、生徒が課題に主体的に取り組み、一人一人がしっかりと思考している様子を具体的に参観することができた。

④ 公開発表会・学力向上フォーラムでの公開授業実践や参観者からの意見や感想、講師を招聘しての研修会等を通して、主体的･対話的で深い学びの視点での授業づくりについて、学びを深めることができた。

☆公開発表会参加者のアンケートから

【２９年度　数学】

・指導者が明確にしていた子ども達のゴールの姿が、終了のチャイム２分前に実際に見られ、「アー」という声とともに結末をむかえることにつながっていた授業でした。取り組んだ課題が基本の公式につながり、必然性のある課題になっていました。
・「生徒の発言を拾い、全体に広げたり、投げかけたりする。」研究テーマの「主体的・対話的で深い学び」を実践している授業であったと思います。先生が説明する部分を極力減らすことはテーマを実践するのに必要であると私は思いました。教師＝ガイドを目指して私も授業改善に取り組みます。
・生徒が先生の問いかけに熱心に耳を傾け、全員が真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。きっと、生徒は数学の面白さを感じていたと思います。

【３０年度　国語】

・子ども達の考える力、考える視点、発表する態度、どれもすばらしかったです。テンポの良い授業でしたが、個人で考える時間をしっかりと確保していて、メリハリのある良い授業だったと思います。
・意見交流が活発に行われた授業でした。言語活動でも、ただの活動だけではなく、調べて、考えて、表現するという、理想的な形になっていました。
・主体的・対話的であればあるほど、学習課題の設定には難しさを感じています。生徒の声を課題に生かすという点は、学習に引き込んでいく上で、とても有効な方法だと感じました。

【３０年度　社会】

・新学習指導要領の主体的・対話的で深い学びに向けた導入の工夫と振り返り、思考ツールの活用による深い学びの場面を見ることができました。
・単元の初めの段階で、付箋に様々なキーワードやするどい視点が書き込まれていて、日頃の授業で鍛えられていると思いました。
・ウェビングマップで個人の考えを広げ、資料のギャップから生徒の関心を高めることで課題の設定につなげる工夫がすばらしかったです。また、グループワークがスムーズに行われており、普段から思考ツールを活用している様子がうかがわれました。生徒が自らの考えを深める姿が見られ、授業や単元を組み立てていく上で、大変参考になる授業でした。

⑤　公開発表会へ向けて、全教員での指導案検討会を実施し、「教科の枠」を超えて「自分の教科だったら」「自分の教科に生かせる点は」という視点での話合いができ、他教科から学ぶ時間にすることができた。

⑥　研究授業では、事前に参観の観点を明確に示し、協議では、マトリクスシート法等を用い、「本時の検証場面」と「その他（検証場面以外で気が付いたこと等）」の２点に絞り、成果・課題と改善策（アイディア）を連動させて、子どもの学びの姿を基にした話合いを行うことができた。

本時は、研究主題に迫るための具体的な取組「自分の考えをもとに、他者との対話を通して多様な考え方に触れ、新たな気付きや思考の深まりが生まれるような場を意図的・計画的に設定する」に関して、教師側で生徒の気付きを導く発問をしたり、対話の場面を設定したりしたことが、生徒の思考を深めていたか（生徒の発言やノートの記述）を検証することになります。

【参観の観点を明確に示す（「理科」研究授業「授業参観のポイントシート」から抜粋）】

	検証場面…指導案の点線囲み部分 『教師側で生徒の気付きを導く発問をしたり、対話の場面を設定したりしたことが、生徒の思考を深めていたか』（生徒の発言やノートの記述）	その他（検証場面以外で気が付いたことなど）
成果		
課題・疑問点		
アイディア		

【成果・課題と改善策（アイディア）を連動させて話し合う（協議で用いたシート）】

☆職員アンケートから（記述式でのアンケートを実施）
（生徒の変容について）
【２９年度】
・単元の最後に、グループごとに全員が発表するというゴールを設定し、生徒と共有することで、そこに至るまでの個人での読み取り、グループでの意見交換・台本作り・練習・発表と見通しを持って大変意欲的に取り組んだ。
・最初に個人で全ての場面について考える時間を設定したこと、各場面に複数のグループをあてたことで、発表を聞く際も自分の考えとの違いやグループごとの差異を比較しつつ、能動的に聞くことができた。
・思考の流れに沿った板書を意識したことで、ノート（ワークシート）にメモをする生徒やつまずいた時にノートに戻って手掛かりをつかもうとする生徒が増えた。

・教科等に応じた見方・考え方を働かせて思考する場を意図的に与えたところ、公式を自ら発展させようとする姿が見られた。
・ある単元で文章の内容を一部図式化させてみたところ、生徒たちの理解が深まった。

【３０年度】
・生徒にとって必然性のある課題を設定することにより、自分事として意欲的・自主的に学習に取り組む姿が見られた。
・一つの課題に対して、思考ツールを活用して話合いを行うことで、整理・分析できる力が確実に向上した。また、課題を協力して解決する、新しいアイディアを考える、現状を打破するなど、生きる力にもなっていると感じている。
・個人で解かせる時間を確保した後、すぐに発表させるのではなく、ペアで確認させてから発表させることで、少し気軽に発表できるようになった。
・教師がテストで課題だと感じた英作文について、その力を向上させていこうという思いを生徒に話し、帯活動で練習を継続したところ、書くことに対する意欲が高まった。
・例題を示し、まず自力で解かせ（考えさせ)、周囲と相談、確認させた後、「問題のポイントはどこか？（どのような見方をすればよいと思うか？)」という発問を継続して行ったことで、例えば、「補助線を引くと直角三角形ができ、三平方の定理を使って高さを求められます」などの発言が出てくるようになった。
・案内文を書く授業を行った際、自分が書いたものと他の生徒が書いたものをグループで持ち寄って読み比べ、全体でも意見を紹介し合うことで、項目を整理して書くことや相手意識をもって図も案内文の中に入れるなど、様々な意見を知ることができた。そのことで、新たな考えに気付くことができたり、自分の考えを深めたりすることができた。

（教師の変容・感じ方について）
【２９年度】
・学習活動の手立ての与え方で、与えすぎず、全体で確認しすぎずという部分を意識している。
・目標を明確にすることで、「どの場面で何を考えさせるべきか」が考えやすくなった。
・子ども達に教科（教材・単元）の面白さを感じさせるために、自分も含めて、「教科の面白さ」について考えるようになった。
・目的を明確にしたペアや少人数グループでの協働的な活動を行うようになった。
・振り返りの大切さについて考えるようになった。振り返ったことを次の学びにどう生かすかについても考えるようになった。
・現代文では、主題や構成を適切に読み取らせるため、題名と文章の内容との関わりに必ず触れるようにした。

【３０年度】
・生徒にとって自分事となる必然性のある課題を設定することにより、活動の内容やねらいが明確になった。
・地理の統計、地図、歴史の年表について、時事問題を常に意識させ関連づけたり、そこから学習課題や活動を生み出したりしていくことで、様々な面から社会という教科を感じさせることができ、生徒の意欲の向上につながったと思う。
・できるようになったことを振り返らせることに加えて、まだできていないこと（分からないこと）についても書かせることで、教師へのフィードバックにもなっている。
・前時の復習を大事にし、学ぶ内容のつながりを意識させた。復習、つながりを意識した授業では生徒の理解度もよくなっていると感じる。

（３）　今後の課題

①　インプット→アウトプットのプロセスにおいては、引き続き、活用を強く意識していく必要がある。特に、「この単元で活用させるべき既習事項は何なのか、それを使ってどのように考えさせるのかを明確にすること」、「学んだことを実際に使ったり、生活における課題の解決に生かしたりする場面を設定すること」に留意していきたい。

②　生徒が自分の学びにおける成長や変容を振り返り、次の学びへの見通しや目標を持つことができるよう、まとめと振り返りについて、それぞれの意義の理解を深め、意識していく必要がある。

県学習状況調査質問紙調査　　上段：本校　下段：県　（単位：％）

評価の観点	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらな	当てはまらない
授業のはじめに目標（めあて・ねらい）が示されていたと思う	**68.0**	**25.6**	**5.1**	**1.3**
	57.9	28.4	10.6	3.1
授業の最後に学習したことをまとめる活動がよく行われていたと思う	**39.7**	**42.3**	**16.7**	**1.3**
	63.0	26.7	8.1	2.1
授業の最後に学習への取組の様子等を振り返る活動がよく行われていたと思う	**29.6**	**39.7**	**26.9**	**3.8**
	37.5	40.1	17.5	4.8

③　「深い学び」については、各教科における「見方・考え方」についての理解を深め、それらを働かせられるような学習活動を工夫するとともに、「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程の両方を更に重視していく必要がある。

④　各教科で話し合って設定した「教科の面白さ」とそれを生徒が感じることができるような方策については、２年間の取組を踏まえ、再度確認と、必要に応じて見直しをする必要がある。

⑤　一単位時間だけではなく、単元や題材のまとまり、学年の系統性の中で主体的・対話的で深い学びを実現していくために、単元の指導（評価）の構想や年間指導計画を見直していく必要がある。

⑥　資質・能力の評価をバランスよく行うために、ペーパーテストだけではなく、多様な活動に取り組ませる評価（レポートの作成、発表、話合い、作品の制作等）など多面的・多角的な評価について指導者の学びを深めていく必要がある。

⑦　中高６年間を通して着実に生徒の資質・能力を育んでいけるよう、中高合同での教科部会で目標や手立て、生徒の学びの状況を共有したり、実践を参観しあったりする機会をより充実させていく必要がある。